

## ? . 50周年記念座談会「研究所50年の回顧」

雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	44
ページ	1(284) -25(260)
発行年	2009
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009297/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009297/</a>

TOYO UNIVERSITY ASIAN CULTURES RESEARCH INSTITUTE

## 東洋大学アジア文化研究所

(旧東洋大学アジア・アフリカ文化研究所)

### 創立50周年記念行事

#### I . 50周年記念座談会

「研究所50年の回顧」

2009年6月20日（土） 15：00～18：00

#### II . 国際シンポジウム

「アジアにおける農村社会の変容～環境・格差・貧困～」

The Transfiguration of the Rural Societies in Asia : Environment, Income gap and Poverty

2009年10月17日（土） 13：00～17：30

# I. 50周年記念座談会

## 「研究所50年の回顧」

日時 平成21年6月20日(土) 15:00~18:00

場所 白山キャンパス第一会議室

出席者：恩田彰，吉田辰雄，針生清人，谷口房男，比嘉佑典，横川伸，野間信幸，石井隆憲，  
飯塚勝重，竹内老子

アシスタント：大澤晴美，竹内洋介



(野間) 本日は，お忙しい中をお集まりいただきまして，ありがとうございます。ただ今よりアジア文化研究所創立50周年記念の座談会を開きたいと思います。

本日の座談会は，研究所の創立50周年記念行

事の一環として開くものです。座談会の目的は，一つは研究所の歴史を記録すること，一つは提言をいただくというところにあります。記録と申しまして，今までも研究所にはたくさんの記録が残されてはおりますが，当事者にしか分からないようなエピソードなど，文献から漏れ落ちたものが随分あると思います。それらを拾い上げていきたいということも，考えております。ですから，思い出話なども含めまして，気軽にお話しただけたらと思っております。

もう一つの提言といいますのは，研究所がいろいろ難しい状況にありますので，研究所の在り方，運営の在り方に対して何かご提言いただければ，それを今後の方針を探っていくことができると期待しております。

座談会の運びについてですが，おおよそ10年ごとに区切って進めていきたいと思っております。ただし初期の10年ばかりは，皆様方の記憶をうかがいながら，埋めていきたいと思っております。

ではまず今日ご出席いただいている方々を，紹介しておきたいと思っております。所長になられた古い順にお名前をお呼びいたします。

まずは恩田先生，つづいて針生先生，吉田先生，比嘉先生，谷口先生，横川先生。それから，研究所の発足当初から運営委員として研究所の

## I. 50周年記念座談会

運営を担ってこられた飯塚さんが来てくださっています。それから、研究員として所属していたこともあり、また研究所嘱託職員として長らく勤務された竹内さんにもご参加いただきました。皆さんどうぞよろしくお願いします。

今日、座談会の前半で司会を担当させていただきますのは、運営委員を務めております野間と申します。そして後半は・・・。

(石井) 運営委員をやっております石井です。よろしくお願いします。

(野間) 至らないところが多々あると思います。どうぞよろしくお願いします。

では、始めましょうか。まず、現在所長を務めておられます谷口所長にごあいさつをいただきたいと思います。

(谷口) 本日はご多忙のところお集まりいただきまして、ありがとうございます。

当研究所は1959年5月に創設され、今年の5月で創立50周年を迎えたわけですね。われわれは、昨年度から創立50周年記念事業を実施しようとして、いろいろ検討してきましたが、三つの行事を記念事業として行いたいということで、企画してまいりました。

その一つが、創立50周年記念座談会で、本日開くことになったわけですね。二つ目が、創立50周年記念国際シンポジウムで、中国・韓国、インドから専門の方をお呼びして、シンポジウムを10月17日に開催する予定にしております。もう一つは、50周年記念祝賀会で、このシンポジウム終了後に予定しており、多くの方にぜひともお集まりいただきたいと願っております。われわれは三つの記念行事を企画してまいりましたが、本日はその第一の行事である創立50周年記念座談会を開催したところです。

そこでまず、研究所の現状を紹介しておきます。本研究所の組織体制は、研究員が今年度54名であり、客員研究員が50名で院生研究

員は4名という108名で構成し、研究活動を行っております。とりわけ日常的な研究体制としては、六つの研究班を組織して活動し、それを基礎にして五つの研究所プロジェクトが活動を展開しております。

こういった中で、われわれは10名の運営委員で年に7回ほど運営委員会を開いて、研究所の運営に当たっております。とりわけ研究所改革と同時に、スタートした学術フロンティアは5年間を経過しさらに継続し、3年間延長して今年度末でこの研究活動は終わることになっておりますが、比嘉先生を中心にしたアジア地域研究センターが研究所内に附置されております。

このように研究所は現状の体制で活動を展開してきておりますが、本日お集まりいただきました先生方には、まず50年を回顧するとともに今後の研究所の在り方を展望していただきたく、何とぞよろしくお願いいたします。

(野間) どうもありがとうございました。

では、座談会に入りたいと思います。

所長のお話にありましたように、研究所の創立は1959年5月であります。最初はアジア・アフリカ研究所として発足し、1963年になりますと、アジア・アフリカ文化研究所と改称されております。この辺りの所長の名前は、研究所の沿革史で見ますと、大嶋先生、佐久間先生、市村先生と続いていくわけですね。最初の10年、この3名の先生方のお名前が挙がっておりますが、とりわけ市村先生の所長の期間が7年間と長くなっております。幾つかの資料にこの期間の回顧が載っておりますが、よく分からないところもあります。

この辺りをよくご存じなのは、発足当初からいらっしゃる飯塚さんですね。まず口火をきっていただけますか。

### 創設のころ

(飯塚) 私は1961年卒業と同時に、職員となっ

て学生部の所属にはなりました。間もなく史学科の助手を致しましたので、この研究所の創設から佐久間鼎先生が2代目になる、その最初からお付き合ひがあり、主として事務的な側面で仕事をするのを兼ねておりました。このアジア・アフリカ研究所が設置された後、なぜ継続されなかったかということについては、今までも書かれていますように、非常に高邁な精神、それから広い点でアジアを見直そう。ちょうどアジア・アフリカという地域の第三世界の民族の勃興ということも含めて、戦後の日本も遅れず発展していかなければいけない。そういう日本の社会的な影響も受けて、東洋大学においてもこれを研究する機関として発足しました。特に理事長をされた大嶋豊先生の考え方が非常に濃く影響されて設立されました。ただ残念ながら、東洋大学の中でそれを受け入れて研究所に発展させるメンバーがまだそろっていなかったということもあると思います。特に、政治的な問題でどう絡んでいくかということ、これについては、やはり文化系で始まった東洋大学の少し不得手な面もあったと思います。

それで1961年に佐久間鼎学長が所長になられたとき、先生は「光は東方から」という言葉が大好きで、オリエントということであって、東方学研究所というような性格を考えられましたが、結局、アジア・アフリカ研究所を継続しながら充実させようということになります。

佐久間先生の後、市村其三郎先生が所長になりますが、そのときにこの研究所をどうやって学内で各方面の方々に参加していただいたらよいかということで、やはりアジア・アフリカだけでは名称的には範囲が広すぎて、焦点がなかなか定まってこないのではないかということがあり、その当時、比較文化という言葉も出始めていましたが、比較文化研究所というのは既に幾つかのところで採られているということもあって、私は僭越ですが、市村先生に申し上げたのは、やはり東洋大学は文化を中心とした大学づくりをずっとやってきたので、アジア・ア

フリカ文化研究所はどうでしょうかということをお願いして、たまたまそこに落ち着いたということになるかと思います。

この頃は、恩田先生や高橋統一先生など、特に社会学系統の先生や教育系の先生が市村先生を助けて研究会、研究発表会などをされておりました。後に、史学関係の先生が加わって今日に至る基礎を築いたと思います。大体、出発はそういうところですよ。

(野間) どうもありがとうございます。初期の10年を私どもが今から振り返るのに、例えば5代目の所長をなさっていた船木勝馬先生が、「研究所8年の歩み」という文章を残してくださっております。それを読んでおりましたら、アジア・アフリカ文化研究所の時代に運営体制が結構整ってきたのかなと読み取れる部分があります。例えば、運営委員会のようなものが設置されて、運営委員が選出され、規程もできた、予算案もできたということらしいのですが、この運営委員の中には、今お話しくださいました飯塚さんと共に恩田先生も入っておられますね。

## 研究所の名称

(恩田) そのこのところは私はちょっとはっきりしないのですけれども、一つ思い出すのは、私のやったことの中でアジア・アフリカという研究所の前に文化という名前を付けたのは私の発想ではないかと。自画自賛では困りますが、それだけ印象が残っています。これは、佐久間先生の時代でしたか何か知らないけれども、私が言ったことで「それはいいな」となってしまった、そういう印象を持っているのですが、それは私のイメージだけかもしれません。そういうことが未分化の時代からだんだんと形を成していく、そういうところがあって、あるいは、運営委員会などで何かそういう話が出たようなことが今思い出されます。

そして、佐久間鼎先生は学長であり、心理学者です。ドイツに留学されて九州大学の心理学研究室を作られました。ゲシュタルト心理学の大家で、日本語音声学の大家です。それで恐らく国文学科の先生に來られましたが、そのとき私が心理学をやっている、佐久間先生を中心として昭和36、37年に禪の医学的・心理学的研究という世界で始めての、禪の科学的研究をやりました。先生が学長であり、班長であって、それで7大学の先生を集めて共同研究をやって、それで私と東京大学の平井富雄という人が幹事をやったのです。東洋大学を中心に研究が行われたのです。

ですから、そういう面では、アジア・アフリカ文化研究所では、市村先生が所長の時に、宗教儀礼の比較文化的研究ということで、禪の研究を行(ギョウ)の研究として、私がやってきたことは、佐久間先生とのつながりがあるのではないかと思います。

(野間) 今のお話で、研究所の名称について触れられましたが、現在、われわれの研究所はアジア文化研究所になっております。アフリカが取れてしまったわけですが、やはりこの時代はアフリカをアジアと一緒にくっつけて語るといふ雰囲気があったと思います。その辺りはいかがでしょうか。

(恩田) 高橋統一先生が來られて、あの方はアフリカ研究で、傑出しておられていたという印象を持っているわけです。当時、アフリカ関係ではほかの方はまだあまりやっていなかったようでしたが。

(飯塚) アジア・アフリカ研究所が発足するあたりで、社会学系統でパキスタンのイクバルという詩人・哲学者の業績を研究する会ができております。イクバル(記念)祭というのを研究所も共催してやりましたが、そこに内藤智秀先生がおいでになって、内藤先生がマグレブ、例

のアフリカ連邦会議の研究をされているということに加えて、ケニアの民俗誌、特に年齢階梯制を中心に研究する高橋統一先生がおいでになるので、アジア・アフリカ文化研究所が成り立つと、そういうことだったと思います。

(野間) やはりアジアとアフリカという名称は、くっつきやすかったのでしょうか。最初の10年の期間、断片的な思い出話でも結構ですが、何かエピソードみたいなものがございましたらご披露いただきたいのですが。

(飯塚) 内藤先生が兼任でおいでになった辺りで、まだアフリカを名称的には残しているわけですから、それが社会的に一人歩きしているようなことがあって、ケニアあるいは東岸の辺りで産業を興すときに、アジア・アフリカ文化研究所に問い合わせがあるというような、これは、竹内さんあたりに直接打診があったのですが、アフリカでニワトリを大量飼育をするために知恵を貸してほしいというような問い合わせが幾つかきました。

(竹内) 九州の伊地知研究所等からアフリカでトラックはどのくらい走っているのかとか、経済活動に直接関わる問い合わせはありましたが、正確に答えることはなかなかできなかった。

(恩田) それから私にとって印象的なのは、高橋統一先生のアフリカ研究はフィールドワークとして向こうに行かれて現地調査をやっておられました。ところが、現地の受け入れがむづかしく、行けないような状況があって、それで研究が困難になったということがあったようですが、あの方のそういうフィールドワークを先駆けてなさったということでアフリカ研究というのがあったのですが、そういうものが大体衰退し、それでやがてアフリカ研究がなくなるという面があるのではないのでしょうか。やる人がいなくなってしまった。

(竹内) ほかに、福鎌忠恕先生がマグレブ調査をされて、細々ですが、アフリカに関しては研究が続けられました。

(野間) 鉱脈がずっと流れていたと・・・。

(谷口) 1979年に創立20周年記念行事が行われ、そのときにシンポジウムとして「日本におけるアジア・アフリカ文化の理解」という統一テーマを掲げて、何人かで報告するということがありました。

まず渡邊宏さんが「日本人の西アジア・アフリカ観」、小林隆夫君が「世界史教科書にみるアジア・アフリカ—東南アジア史—」、そして私が「戦後日本におけるアジア・アフリカ像構築のとりくみ」について、特に私は、上原専禄先生が戦後強調されていたアジア・アフリカの動きについて、世界史的な動きから、一つに括って理解しなければならないというような取り組み状況を簡単に紹介したと思います。

われわれの研究所は、具体的にアフリカを研究課題にして取り組んでいる人が確かに少ない状況でありましたが、その当時の状況から見れば、大きな戦後の流れの中でアジア・アフリカを一つの政治的、あるいは歴史的な動きとしてとらえていく必要があるということを20周年記念のときに取りあげました。

## 研究所の所在

(野間) では、20年目のところまで範囲を広げていきたいと思います。その前に僕は一つだけ気になることがあります。われわれの研究所があったのは、80周年記念館の何階でしたか、9階でしたっけ、そこで長らく研究所を構えておりました。あそこに研究所を構えたのが1966年という記録が残っていますが、それまでどこにいたのですか。どこにも書かれていないです。われわれの研究所はいったいどこにあったのでしょうか。

(飯塚) 場所は定まっていず、学長事務室に同居していたことがありました。

(谷口) 学長室の隣の部屋にあったのですよ。だから、66年までは研究所というちゃんとした部屋がなかったのですね、私の記憶では。

(飯塚) 学長室は当時の2号館2階にありました。旧2号館入口は四聖の像が刻まれていました。その建物を入った2階のちょっと横に。

(竹内) 後の5号館の2階にあったのですね。

(竹内) そうすると、アジア・アフリカ文化研究所というグレーのペンキで書いた看板が残っていたのは、あれはどこに掛かっていたのですか。

(谷口) それは後ではないですか。

(野間) その看板は残っているのですか。

(竹内) はい。

(野間) それならぜひ、うちの大学の博物館に入れてもらいたいですね。

(竹内) 100周年記念の諸行事に貸し出して、写真を撮っているはずですよ。

(野間) そうですか。それはすごいですね。50年物語にふさわしい話題ですね。

(飯塚) アジア・アフリカ研究所というときは、昔、大講堂というのがありました。

(野間) 大講堂なら、覚えています。

(飯塚) 大講堂があって、その大講堂の1階の奥に学長室も置かれたのではなかったかなと。

## I. 50周年記念座談会

一時的にですね。そこのところにアジア・アメリカ研究所という看板が出たと思います。

(野間) そうですか。これは聞いておかないと分からないことでした。ありがとうございます。

### 創立20周年のころ

(野間) では、研究所創立20年ぐらいまでの話をうかがっていききたいと思います。研究所が20周年を迎えますのが1979年になります。この20周年記念に際しましては、当時の所長である恩田先生が「研究所創立20周年を迎えて」という文書を残してくださっています。ここまでの間で所長をなさったのが、市村先生の後には、千葉先生、船木先生、そして1期目の恩田先生ということになるわけですね。79年になると、高橋統一先生まで入りますか。そして、2期目の恩田先生が79年4月から所長ですから、その辺りで20周年を迎えたということになりますね。この間、竹内さんが研究所にお勤めになるのですね。

(竹内) そうですね。

(野間) 20周年で何か思い出に残っていることがありますか。竹内さん、口火を切ってください。

(竹内) 最初に、先程谷口先生がおっしゃったように、シンポジウムのような形で何か大きな会をしようということになって、恩田先生をはじめ運営委員会で計画を練ったと思います。

そのときに一番話題になったのは、初期の頃からいらしたメンバーの先生たちがかなり高齢でいらして、内藤智秀先生、野溝七生子先生、それから井上敬一先生あたりが多分70歳を超えられておられました。そこで定年の年齢をどう

するのかということを大学からも聞かれておりました。そうした先生方はよく研究所にいらしていたので、別にメンバーでなくても私たちを指導してくださるだろうということで、シンポジウムの最後に感謝状を差し上げて、研究員というものを一応70歳で区切りましょうかということになりました。定年という形を作ったのはこの時が最初だったと思います。

それで、恩田先生と感謝状の用紙を購入し、恩田先生の奥様に書いていただいたと思います。

(恩田) そうだ、思い出した。(笑)。何か書いた。

(竹内) 用紙だけを買ってきて、手作りでした。また初めて外から食事を取ってパーティを開きましょうということになり、記念写真も会議室で整列して撮影しました。私一人でかなり大変だったように思います。感謝状を差し上げて、何か記念品を差し上げたと思います。

(野間) 記念品もあったと記録にありますね。

(竹内) こういう会合を学内でやった最初だったと思います。

(恩田) よく覚えておられました。私はすっかり忘れてしまいました(笑)。

(野間) この20周年のとき、シンポジウムを開いていますね。

(竹内) ええ。このとき研究を一番盛んにやっていたいらした谷口先生、小林隆夫先生、渡邊宏先生がシンポジストをされたと思います。基調講演は他大学の先生にお願いしました。

(野間) その頃研究班などができて・・・。



(飯塚) 大森元吉先生といって、国際基督教大学から呼んでやっているのですね。

(竹内) アフリカの民俗、アフリカについて何かお話しただこうということで、大森元吉先生をお願いしたのです。タイトルは「東アフリカの近代化、ウガンダ地方都市と農村の近代化過程」でした。

(野間) 研究所は当初、社会学部の先生、というより文学部社会学科であった時代の先生方が中心になっていたということも記録にあります。研究班などが出来上がってくると、文学部の先生が増えてまいりますね。谷口先生のお名前は、この辺りで記録に登場しますが。

(谷口) 研究班というか、幾人かのグループで研究する。例えば、宗教関係で統一テーマが設定されると、中国に関するテーマとしては船木先生を中心にして私や飯塚さんで。そして、日本に関するテーマだと、千葉先生、それから佐藤俊雄さんら何人かで、取り組んだ。

(飯塚) そのテーマを決める最初は、アジア・アフリカ文化と付けて何をやるかということで、なかなかテーマが固定していなかったのです。個別の研究があったのですが、全学組織の研究所であるからには共同研究が必然だということで、やがて宗教儀礼の比較文化的研究をテーマにしようということで、それもまだその当時、諸外国へ行けるのは経済的な状況も含めてなかなか困難だったので、日本における宗教儀礼の比較文化的研究を一つの固定したテーマにした。

それで、地域的な分け方、あるいはテーマによるグループ分けみたいなものが最初だったと思います。その中でも、離島、八丈島あるいは伊豆七島の宗教儀礼がどのようだったかということですね。そのようなところが研究の中心にありました。そのほか、恩田先生などの禅の研

究や創造性研究などそういうものが一つのグループとなってきたと。

その後、テーマの宗教儀礼が少し発展した形で拡大されて、日本とアジアの周辺文化の交流と変遷の研究というふうにはテーマが少し拡大されてきて、その中で船木先生を中心にして、後に谷口さんが受け継ぐ『華陽国志』の研究というものが始められるなど、グループ研究が固定してきたのではないかと思います。

(野間) 20年というのは、人間でいうと10代のころですから、随分やんちゃもするようなそういう若さのある時代だと思います。竹内さん、運営上で何か困ったようなこととか、エピソードはありませんか。

(竹内) 今、お話があったグループで文献を読んで、文献を中心に訳注などを作っていたら、グループと、あと、高橋統一先生を中心に日本の中の年齢階梯制をテーマにあちこちで調査をされていました。まずその調査費を学内で書類を通すのが大変だったと思います。

ここの研究所の一番いいところは、研究に興味のある方達が学内外を問わず参加していた事だと思います。私の記憶では全員が41～42名で、半分くらいが学外の方です。学外というか、東洋大学を専任にしていられっらない方で、約半分ずつでした。ただ学外の方たちに海外出張の許可を得るために、運営委員会で推薦文を付けて、それでもなかなか通らなかったのですが、それでも先輩諸氏が一つずつ調査を進めていこうという、そういう気運は高かったのです。

それで、最初は宮座で奈良県へ行ったり、金山町へ行ったり、調査もだんだん進んできましたが、1回の調査の実施を通すのにかなり大変でした。

でも、それをやって、その報告を年報に載せていったことで、予算要求のときの内示があったときに折衝がありますが、実際に成果を報告

したことを示すことによって、予算は増えていったと思います。

(比嘉) これまでアジア・アフリカ文化研究所というのは、そういう文化面あるいは歴史的な研究、宗教的なもの、社会学的な研究がずっと行われてきているわけですが、80年代から、教育の研究もやろうということで、アジア地域における学校教育および社会教育の地域的特性に関する比較教育研究に着手し、倉内先生や西村先生が登場してきます。

ついては、沖縄県における教育、学校教育および社会教育について調査をしようということで、「比嘉君、君は研究所員になってもらい、沖縄出身だから同行してくれないか」ということで、私が研究所へかかわるきっかけになっています。「では、お供しましょう」ということで、本島から宮古、八重山あたりまで教育の調査をしていったのです。大体この辺りからだんだん西村先生の紹介で西野節夫先生や井上星児先生なんかもかかわるようになって、そこでインドネシアの教育やアジア地域の教育の問題にもかかわってくるという一つの突破口がこの辺りにあったと思います。

(野間) お話が80年代に入りましたが、また20周年の時代まで戻ってもらって結構ですの

(恩田) 今ちょっと思い出すが、うちの研究所は文献研究というのは従来中心でありましたが、フィールドワークというと外国に出ます。研究範囲が広がると研究費が必要となり、予算をつけるよう大学への要請もふえてくる。そのための事務的な一面での当事者間の交渉もふえてきました。

そういう問題がこの研究所の発展の歴史に何かあるような気がします。研究費の増加と、それから海外へ出ていく。それがここでポツポツと始まったということのをちょっと思い出しまし

た。

### 創立30周年まで

(野間) 創立後30年あたりまでを視野に入れますと、つまり1980年代になりますと、海外調査が随分増えてまいります。研究所として予算を付けた初めての海外調査は、高橋統一、松本誠一先生の韓国調査とかがついています。これを皮切りにこの20年から30年は、中国、台湾、インドネシア調査がはじめられました。海外からの研究者をまじえての国際シンポジウムもこの時期に盛んに開催されるようになります。東洋大学創立100周年の記念事業に応募し、日韓国際シンポジウムを開催したのもこの時期です。研究所創立30周年には7カ国の留学生を招いて「異文化間のコミュニケーションの可能性」を探りました。以後国際シンポジウムが毎年開催されるようになります。海外からの研究者の長期受け入れもこの時期に始まります。また1983年には、単行本（研究叢刊Ⅰ）を発行しています。

この辺りは所長が針生先生になるわけですが、針生先生の第1期は8年間ですね。恩田先生の後、針生先生、また恩田先生となっていくますが、針生先生、この辺りで何かございますか。やはり海外研究が増えてきたということでしょうか。

(針生) 簡単に言えば、大学も少し豊かになったということ。それから、私大助成金をもらったこと。これは2回もらっています。

(竹内) いえ、3回です。

(針生) 3回ですか・・・僕は次に授業があるので、先走って話します。本当は、この研究所は偉い先生がたくさんいて、われわれ若造はなかなか入れなかったというのが最初の実情だったと思います。仰ぎ見るのもおっかない、敬う

べき先生。最初僕は日本思想なんかの勉強をや  
りたかったので、そういう話を研究室の人たち  
に話すと、突如として東洋学研究所に入れら  
れてしまいました。しかし、東洋学研究所に入  
てみると、何も日本思想の勉強にならないの  
で、すぐ辞めてしまいました。そこで船木先生  
が研究所に來いというので、AA研に入って今  
日まで縁があるわけです。

そのころは、文系という佐久間先生は別格  
ですが、だんだん若くなってきて、船木さん  
もまだ40代後半でしたか、50代にはなって  
いませんね。だから、僕なんかは平たく言え  
ば話やすかったです。それが一つあったと思  
います。

研究所の仕事については、所属する前から  
幾つか見てはいます。一つは、創立に関係  
していた、当時まだ文学部社会学科時代の渡  
邊博史さんの仕事です。渡邊博史さんは、二  
部の授業を持ったときに、二部の学生を連  
れてイスラエルでキブツの研究を『キブツ  
とは何か』という本を学生たちに書かせたり  
していました。そういう仕事を、うらやまし  
いという気持ちで見えていました。そういう  
ことが一つあります。

もう一つは、1979年以降の文献研究では  
少し方法論的に何かしようということになり  
ました。当時、われわれの頭の中に浮かび上  
がってきたのが、比較思想や比較文化という  
ようなことだったので、所員全員が集まって  
、研究社の『比較文化』という講座ものを1  
冊ずつ分担して、読書会のようなことをや  
ったりして、一種の方法論のようなことの模  
索をあらためてやりました。

だから、この時代、20年代というのはど  
ちらかというと勉強する、研究というよりは  
、まだ勉強会に近いようなことがあったの  
ではないか。だから、月例の研究会では、そ  
れぞれのレパートリーを持っている人は勉  
強していることの一端を披露し、それをわ  
れわれが学ぶという姿勢が強かったような  
気がします。

そういうことがあって、メンバーも比較  
文化や比較思想に関心がある末木さんや小  
林忠秀さ

んとか平野耿さんという人たちも入って、  
比較哲学までは行きませんでしたが、比較  
思想のようなことの勉強会を1年くらい続  
けたのではないのでしょうか。

(竹内) 2年くらいです。講座『比較文  
化』を1冊ずつ担当して、すぐになかなか  
勉強会ができませんでしたが、何回か続け  
ました。

(針生) そういう至福の時代が、20年  
の終わりと30年の初めくらいだと思います  
。だから、研究所50周年といいますが、本  
当に何と云うか、揺籃期といえば聞こえは  
いいですが、幼稚な段階もあったと思わず  
におれません。それから、調査費を使える  
ようになったのは、もうちょっと後になっ  
てからの話ですね。

海外研究は、やはり近いところから始  
まったのではないかと。韓国、しばらく置  
いて中国、それも旧満州に近いようなところ  
とか、そういう日本に縁があり、日本に関  
心のある向こうの人、あるいはまだ日本語  
が十分に理解できて、日本文学などをしゃ  
べっている人、日本哲学をしゃべっている  
韓国の大学教授とか、そういう人たちを招  
いて、やはり勉強会で下地になるようなシ  
ンポジウムや研究会、講演会とかを開いた  
。だから、はっきり言って国際シンポジウ  
ムと命名はしていたかもしれませんが、ど  
ちらかというとまだ勉強会的なところがあ  
りましたね。

この初期の段階というのは、最初はた  
だ研究所もなかったというけれど、それぞ  
れの研究者の研究室が研究所の分室みた  
いな形で、バラバラだったのが、勉強会  
という形で少しまとまってきた。しかし、  
内容的にはまだ勉強会というところだっ  
た。たとえば、研究所はまだ分教場みた  
いなところだった。それが本校舎風にな  
ってきたのが20年代くらいかな。だから  
、船木さんあたりから恩田先生につなが  
るところがそういう時期にあたりますね。  
その後、韓国から來た崔在律(サイザイ  
リツ)先生という人が

いみじくもわれわれの研究所を見たときにあまりにも貧弱なのでびっくりされた。それで、これは国際的な問題、国恥問題ではないかということになった（笑）。

そういうことを考えると、ではそれが解消されたかという、僕はまだ本質的には解消されているとは思えない。ただ、僕が所長をやっているときに、一番いい仕事だったのではないかと思うのは、谷口君なんかの仕事じゃないですかね。『明実録抄』だったのでしょうか。ところが出版しようとしてもすぐ出ない。そのときに事情を理解する職員が各方面に働きかけてくれました。金はすぐ出なかったかもしれませんが、2年くらい待って第2巻を出してくれました。そういう学内の理解者を増やすということがあった。そのためには各研究員が一所懸命努力をして、一番まじめに仕事をやってきたというふうに僕は思います。そんなことで、僕が一番いいときにいたのかな（笑）。そう思いますね。それから、学術振興会の補助を受けた話がありました。

（竹内） それはちょっと話していいですか。針生先生が所長になられて、先程の「比較文化」をみんなで勉強しようと、実際ものすごく力を入れてやりました。針生先生と学校との一番の闘いは、針生所長が始まってからずっと499万円という予算だったのです。毎回折衝があっても、一所懸命申請書類を書いても499万円。針生先生も499の壁が高いとおっしゃりながら、いつも二人で交渉に行きました。毎回交渉に通っていたある年、或る年やはり499万円と思っていたところ、計算ミスがあって内示額が517万円になっていました。それ以後517万円。それからちょっと増えたそれが最初です。

その後、こんなに頑張って海外にいきたいと言うなら、大学で1件だけの応募ですが、「応募してみてはどうか」と事務方から言われ、申請したわけです。その後、私学振興財団が3年、3年、3年で3回取ることになるのですが、

499万円を毎回嘆いて、訴えた結果、その私学振興財団につながっていくことになりました。

（針生） 本当に、所長の仕事というのは、脅かすことと、悩みをぶちまけること。

（野間） 歴代所長が、皆さんうなずいておられますね。

（針生） だから、所長会議もサボっては駄目ですね。会議は絶対サボっては駄目。いつどこでどういうふうひん曲げられるか分からない。そういうけんかをしながら、足踏みをしながら一步步前進して、やっとここまで来たのではないか。

最後に、比嘉君なんかは億という金をもらった。あれは工学部も出した、東洋学研究所もいろいろな形で出していますね。それらが通らないで、何でわれわれだけが取れたか。実績があったわけでしょう。その実績をやはり公表する。学外には書類とか報告書など出ていきますが、学内の人はあまり読まないですね。畑違いの人にも読ませるべく、努力、工夫、時には漫画化も近ごろ必要らしいから（笑）漫画化したっていいのではないですか。とにかく学生にも知らせる必要がある。教員は何をやっているのかというような学生の疑問に対して。教員の方がそういうことを宣伝していないのです。月に1回くらい、研究所はこういうことをやっている、あるいはこういう研究会がある、こういうパンフレットができたという、学生に対する宣伝も、これは勉強したい人にとって親切だと思います。

今日も、僕は感激していましたが、院生研究員というのができたでしょう。これは中国に行くと、各研究所が学生を抱えているのです。ドクタラート（doctorate）を出すわけでしょう。それを何回も僕は言っていたわけです。やっとそれがこういう正式な名称になったということで、僕にとっては感激。これはいずれ、ただ勉

強させるだけではなくて、博士号の審査までやれる、中国風の、ここまで持っていきたいのですよね。

(野間) どうもありがとうございました。文書に記録されることのないいろいろなエピソードもご披露いただきました。

\*\*\*針生先生退室\*\*\*

#### 創立40周年のころまで

では今、30年のところまで話していただきましたので、次の10年も視野に入れていきたいと思います。次の10年は40周年ということになりますので、1999年あたりまでです。この10年間は私学振興財団から研究助成金を得て、海外調査、国際シンポジウム等が盛んに行われるようになりました。連続の国際シンポジウムの開催や、海外調査も東アジアから東南アジアまで広がりを見せています。そうした海外との交流をもとに研究所を受け入れ機関として、研究者が長期滞在するようになりました。ミャンマーの駐日大使による講演会もこの時期に開かれています。1983年に研究叢刊第1冊を発行した後、第2冊の発行が遅れていましたが、漸く1994年に第2冊を刊行しています。

針生先生の次の所長は、恩田先生の第3期目になります。恩田先生は、通算で10年所長をしてくださいました。

(恩田) 11年です。

(野間) 11年ですか。その恩田先生の第3期の次は、針生先生の第2期の所長時代があり、針生先生は12年です。その後を受けられまして、吉田先生が1999年から2001年まで所長をなさいました。そして、創立40周年を迎えます。先生、何かエピソードがございましたらご披露ください。

(吉田) 幾つかの視点でお話し申し上げます。私は、アジア・アフリカ文化研究所の研究員にさせていただいたころは、先ほども話が出ましたように、教育の恩田先生、倉内先生、西村誠先生、それから比嘉先生と、この先生方がアジア文化研究所で教育関係の研究をなさっていました。非常に魅力を感じて「ああ、いいな」と思いました。

私が東洋大学に専任教員として赴任したのは昭和52年です。実際に研究所の所員にさせていただいたのは、61年か、62年です。ちょうど東洋大が創立100周年記念を迎えて、教務部長の仕事を仰せつかったとき、いろいろな行事があって、やはりアジアに非常に関心があって、それでメンバーに入れていただいた。針生先生が所長でしたが、針生先生は結構辛口で、ただ名前だけでは駄目だ。本当に所員になったら、年報に原稿を書いたり、シンポジウムで発表したり、例会で発表したりとかいろいろな仕事があるといわれたので、それはやると約束しました。

私に関心を持ちましたのは、所属している学会が当時、日本進路指導学会といいまして、進路指導学会は国際団体の二つに加盟していました、そのうちの一つはアジア地域教育・職業指導協会です。当時、ARAVEG、今はARACDで、アジア地域キャリア発達協会と名称を変えています。そちらに非常に軸足を置いたのは、欧米の情報は結構いろいろな人たちが手掛けていますから、割合容易に入ってきます。アジア関係の情報はなかなか入らないので、アジア文化研究所員になって、そちらの方に軸足を置きました。

その頃から、いずれ中国が国際的に力をつけてくると思っていました。私は主として中国・韓国の教育と職業指導・進路指導を手掛けてきました。中国はその頃まだ進路指導という言葉はありませんでしたが、職業技術教育や職業教育とか、そちらの方ではかなり先進的な研究をされていました。そういうことで、関係いたし

ました。

その次の話題に移りますと、やはり確かに研究費はなかなか増えませんでした。教務の仕事をしているときに、今は時効だと思いますから申し上げますが、アジア文化研究所の通常経費の中では谷口先生の『明実録抄』の出版はできません。非常に額がかさみますから研究所ではなくて、大学で、個性形成予算という形でどうかと、学長を説得して常務会に上げましたが、常務会でなかなか「うん」とは言わなくて、2回ぐらい常務会でたたかれて、そしてこれっきりみたいな話でした。ともかく出版しなければということで、常務会で特別予算みたいなことで認めていただいた。そういうわけで、大学は研究費の増額はやはり非常にきつかったのです。教員の個人研究費を少しアップしたいと言いましたら、ある常務が、教員だけが勉強するのではなく職員だって勉強する、職員はどうするのかと言われました。では、職員の研究費を出すのですかと、そういう議論があったりしました。当時、大学としては、財政的にどうだったか細かいことはあまり知りませんが、研究費増額はなかなか難しい状態にあったということが一つあるかと思います。

それから、針生先生の所長時代は非常に良かったと思いますが、後半、必ずしもそうではなくて、私はそのときに所長会議に代理で出ましたが、当時の学長は、国立大学の研究所と絶えず比較しまして、東洋大学は研究所といっても専任の教員や研究員がいないではないかと、よくいわれました。

もう一つは、固定の研究所ではなく、プロジェクトの研究に変更したいと。だから、固定の研究所は廃止して、プロジェクトで、ある研究について予算を付けて、その予算が付いた研究期間は部屋を提供する、終わったら解散するという提案でした。

それは早稲田大学が当時やっていました。早稲田は二本立てで、固定の研究所とプロジェクト研究と二つあり、プロジェクト研究について

は特別部屋を用意していました。東洋はプロジェクト研究だけに一元化するという提案です。それはちょっと具合が悪いのではないかと。私も立場を考えず学長に「私立大学、東洋大学に慣れてください」と進言したことがあります。

そういうところで、一時、学長の方針によって研究所が危機にさらされたことがあったと思います。そういう意味では、東洋大学もだんだん良くなるのではなく、非常に山あり谷ありで、そういう状況が続いたという感じがしてなりません。

それから、東洋大学創立100周年を契機に本格的な国際交流が始まって、特にアジアでは中国との交流が行なわれるようになりました。やはり、それがきっかけで学術研究交流の基礎ができたということがあると思います。

最後の締めくくりですが、東洋大学はいわゆる助手制度を廃止してしまったわけです。こんなに歴史と伝統と実績のある大学で助手制度を廃止したことによって、自前の後継者養成ができなくなってしまいました。だから、そういう意味では、研究所は、先ほど針生先生が指摘された研究所の研究員制度がある意味では大学の後継者養成の唯一の道かと思っています。ぜひそれを維持、あるいは発展していただくといいのではないかと思います。そうしないと、なかなか後継者というのは育成できないのではないかという気がしております。また東洋大学としてアジア文化研究所はここが特徴だという、時代にマッチした研究テーマはいろいろあっていいと思いますが、その研究は東洋大学のアジア文化研究所に行けば分かるよとか、そういう研究の上で財産のようなものが一方であるといいのではないかという気がします。

(谷口) ところで本学の研究所には、学部附置の研究所と、アジア・アフリカや東洋学のように学部の壁を越えて全学に開いた研究所と、大きくいうと二つがあったのです。学部附置の研

究所は、学部先生がみんな入っており、ある意味で学部の研究費と別途に研究所の研究費と二重取りのような形であり、実際には、出版物だって一学部の紀要みたいなものであり、研究所の紀要は別に殆ど作らないという、奇妙な状況であった。それ故に、その後の研究所改革のときにこれら学部附置の研究所が殆ど廃止されたのです。

(吉田) そうですね。そういう意味で、アジア文化研究所は、学内だけでなく学外からも研究協力を得てやっていこうという姿勢で、他大学との研究交流を含めて、得難い人材に客員研究員になってもらい協力してもらって、研究実績の積み上げをしていくという運営をしてきました。

そのことをわれわれも説明はしましたが、なかなか大学の中での理解を得られなくて、逆に他の研究所の悪い例に足を引っ張られて研究費も伸びなかったという気がします。これは今後、研究所の使命というものを大学の中にどう位置付けて、役割を発揮させるかということが非常に大事になるという気がします。

(比嘉) 野間先生ね、吉田先生の時期にあちこちの大学と学術協定を結ぶようになっていて、さっき吉田先生からお話があったように、中国の大学とも協定が結ばれました。確か80年代の終わりからだったと思います。1993年に私は、交換研究教員で華中科技大学に1年間、あのころは華中理工大学といましたが、向こうの高等教育研究所に行きました。

それをきっかけに、アジア・アフリカ文化研究所と交流しようということになりました。「教育の現代的課題」という大きなテーマで、中国と日本の現状についてシンポジウムを行いました。

日本側からは、恩田先生、針生先生、阿部先生と私が出席し、向こうの高等教育研究所は6名の先生方が出てくれました。当時、湖北省

の新聞にも紹介されました。

それ以外では、華中科技大学から交換研究教員が訪ねてこられるごとに、アジア文化研究所の方でその人たちを招いて、研究会あるいは講演会をしたりしました。そういう交流を続けて、その後にまた日中合弁企業の大きな調査で、華中科技大学の出版局から立派な本ができあがりました。

(野間) 30周年を経て40周年に至るまでの、人間でいうと30代のころは、やはり研究所はどんどん伸びていったような感じがいたします。比嘉先生の華中科技大学との交流も、その中の一つの出来事でした。あと、吉田先生が40周年にあたってまとめてくださった「アジア・アフリカ文化研究所創立40周年を迎えての回顧と展望」、この文章の中にもたくさんの講演会・シンポジウム・公開研究例会が、ずらっと並んでおります。

30年以上を経た歴史が、これだけのことを実現させたということがいえると思います。これ以降につきましては、休憩をはさみ、司会を交代して、後半でおうかがいします。

\*\*\*後半開始\*\*\*

#### 【司会交替】

(石井) それでは、司会を交代します。ここまで吉田先生が所長時代までの話でしたが、ここからは比嘉先生の時代へと移ります。そしてここ10年、今日までの歩みというところで、比嘉先生、その後、谷口先生、横川先生、そしてもう一度、2期目の谷口先生という形で所長を継がれるわけです。先生たちはよくご存じだと思いますが、実はこの10年間は、恐らく激動の10年といえますか、闘争の10年という、そういう時期に当たるのではないのでしょうか。特に、研究所がなくなるかどうかという危機も、ちょうどこの時期のことでありました。

まずは、その当時所長をなさっていたらっしゃった比嘉先生の方からお話をお願いしたいと思います。

## 研究所改革

(比嘉) この時期(2001年)、大先輩の先生の後、大丈夫かなと思いつつ、私は13代目所長を引き受けました。振り返ってみると、アジア・アフリカ文化研究所は一言でいうと、闘うAA研だった。いつもわれわれは「野武士のごとく闘うAA研だ」と言って、お互いわいわい言いながらやってきたわけです。

私が所長になったところに、1号館(80周年記念館)の9階の方にあった研究所が、新1号館の方へ移転するという大きな変動がありました。これは大変だということでいろいろ資料等を整理して、移るのに一苦労してやっと移りまして、ここだったら少し広くなったし、落ち着いて研究やいろいろな話もできと思っていたときに、また突然、研究所改革という嵐がやってまいりまして、そのときに先ほど、谷口先生からもお話があったように、これまでの研究所は学部附置研が非常に多くて、少し整頓しようという動きが出てきました。

また、プロジェクトを中心に外部資金をどんどん取って研究体制を作っていこうという考えのもとに、研究所を改革するというものもありました。この大幅な改革を迎えて、一番大変だったのはアジア・アフリカ文化研究所だったと思います。

それでわれわれは何度も呼ばれ、また何度も当局と話し合いをしていく中で、アフリカの研究はやっていないのではないかと、最初からその話が出てきました。先ほどから、この座談会の中で話されているように、アフリカの研究は結構積み上げがあって、そういう研究の成果を強調しました。当時はアフリカが非常に注目されている時期で、アジア・アフリカというものがまた社会的にも大きなテーマになっていた時

期だったのです。そういう時期になぜアフリカを外すのかということで、議論になりました。

簡単な話が、アフリカを研究する人が一人もいないではないかと。こういう単純な発想で研究所の名称からアフリカを取りなさいということと言われたのでした。私たちはこんなことは受け容れられないとして、いろいろ過去の実績等も挙げましたが、ほかの研究所も全部名前を変えるのだから、あなたのところも当然変えてしかるべきだということで押しきられてしまいました。

ついでに、研究所の全体的な改革が、総合センター方式として行われ、研究所の中に、従来からあった事務職員や、研究所に割り当てられた研究費や海外派遣に関する研究費がみんなカットされてしまうということになりました。これは大ピンチです。

そういうこと等もあって、何度も学長室や研究助成課と交渉しました。そして、学部附置研を改革するのは分かりますが、私たちの研究所というのは、先ほど恩田先生がおっしゃっているように、研究所に外部からの研究者も入っていて非常に学際的な研究をしていて、学部附置研のように学部の先生方のみで固めた研究所ではないわけですね。そのことも一所懸命主張しました。うちと東洋学研究所はそういう研究所だからということで、当時、東洋学研究所は川崎信定先生が所長でしたから、一緒に組んで、行動しいろいろ交渉をしてきましたが、やはりどうしても総合研究所のもとに置いて、研究所を束ねて、研究所内にそれぞれのプロジェクトを設けて、そのプロジェクトに対して予算を措置するのであり、研究所全体に対する予算配分をしないということになりました。ついでに、従来専従としていた事務職員もみんな廃止するという、こういう大改革を前に、私たちはいろいろな形で抵抗運動をしてきました。

結果としては、アフリカを引きぬかれて、アジア文化研究所というところで妥協せざるを得ないという形になってしまいました。そして、



この研究所が発展する方向というよりも、むしろ縮小して従来約600万円近い研究所の予算配分が半分くらいになり、紀要の発行と研究所の運営費ぐらいになってしまったということですね。そこが一番大きな節目（危機）だったのではないかと私は思っています。

（石井） ありがとうございます。この時期、私はもう既に東洋大学に勤めていましたが、そのときの記憶を思い返しても、研究所の再編という名の下に一度、研究所を全部つぶしますという説明があって、ついでにはアジア・アフリカ文化研究所もつぶしますと。もう一度、新たに立ち上げればいいでしょうというような、確かそういう説明もあったりしました。恐らく初めてのことでないかと思いますが、研究員全員に何か研究所の説明会がありますから、みんなで参加して質問をしましょうとか、あるいは大学側がどういうことを考えているのかということをやったりみんなで理解する必要があるのではないかと、そういう活動といいますか、そういうことをやったような記憶はあります。

多分、この時に研究員の連絡窓口になっていたのが竹内さんだったと思います。恐らく、研究所が再編された前と後ではシステムが全く、180度というか、本当に変わってしまったという、そういうことも一番よく分かっているのは竹内さんではないかと思うので、その辺のことについて……。

（比嘉） 竹内さんが話す前に、ちょっと補足させてください。さきほど「闘う AA 研」と私は言いましたが、研究所改革ではかの学部附置研究所の人たちは非常に冷ややかで、何の抵抗もなかったのです。最後まで闘ったのはこのアジア・アフリカ文化研究所だったと私はみています。われわれは総会を開いて、学長と当時の教学サイドの役員を呼び、そこで直接やり合ったことも結構ありました。われわれは何度も通って、あなた方（教学サイド）の新しい研

究所体制のビジョンを示せと言っても、ビジョンすら示せないで、今こういう時期で時代は変わったから、そこに新しい研究体制を作るんだの一点張りでした。そういう改革のやり方でいいのかということで、私たちが一番最後まで突っ張りました。

それは、われわれとしては、これまで積み上げてきた歴史と伝統というのを壊されたら大変だという危機感も一つあったことと、当局もやはり最後は、われわれがここまで根気強くやるものですから、「比嘉さん、今立ち上げるのに賛成してください。3年後、見直して、それでいろいろ問題があったら、また改革します」と。「本当ですね」と言ったのだけど、あれから10年たった今日においても、3年後の見直しも何もされないままにきているという、大変残念というか、あの改革は何だったのかということを私は今思っています。

### 研究所改革の問題点

（谷口） 実は、改革の直後、所長を受けたのは私ですから、実際に改革後どうだったかということ踏まえて、あの研究所の改革は何だったのかということ私なりに整理してみると、5つぐらいになるのではないかと思います。

1点目は、さっきも出ていましたが、従来あった研究所、とりわけ学部附置研究所を全部廃止するということを含めて、研究所の名称を残すものは残すけれども、すなわち、東洋学やアジア文化研究所、こういうものは結果として残ったのです。それ以外の学部附置研究所は基本的にはなくなってしまいました。なくなったけれども、新たに設けられてトータルで研究所そのものは五つぐらいになったのでしょうか。

その中で、この研究所としては具体的には研究所の名称変更、すなわち、東洋大学アジア・アフリカ文化研究所という名称を東洋大学アジア文化研究所に変える、これが第1点。

2点目は、以前の研究所は研究員だけでし

た。外部からの者も学内の先生方も含めて、研究員、研究所員でした。ところが、改革後からは、大きく言うと専任の教員が研究員であり、外部から研究所に所属される方は、客員研究員です。それ以外にわれわれのところでは院生研究員という、この三つからなっているのです。

重要なことは、専任の教員が学内の二つの研究所を選択できるようになりました。例えば東洋学研究所にも所属できるし、アジア文化研究所にも所属できる。すなわち、専任教員は、東洋大学にある研究所の二つに所属でき、その所属する人たちが研究員なのです。それ以外に、従来外部からおいでになっていた研究員は、一律に客員研究員になりました。このように研究所の体制が変わったことが2点目です。

3点目は、予算がさっきも出ていましたが、大幅な削減です。具体的には、改革前はこの研究所に大体600万円ありました。ところが半減して300万円になりました。その半分にしたものと、各学部にあった附置研究所の予算を集めて、3000万円あるいは4000万円の金を集めて、研究所プロジェクトや特別研究という形で助成金を申請すれば出すのだと。こういうようにして、従来あった600万円の予算を300万円に削減したのです。

4点目は、事務体制が大きく変わったこと。以前は研究所にはそれぞれ事務員を配置した。必ずしも全部に置いたわけではありませんが、附置研究所などはほとんどいました。われわれのところも竹内さんがいらっしゃったが、改革以後は一切置かないと。ただし、研究所の事務補助員のような人を、例えば東洋学研究所や人間科学総合研究所などに置いていますが、われわれのところには一切認めないということです。その代わり、研究協力課から派遣された事務員のみです。実質的に研究所独自の活動はほとんど事務員が日常的にいてやるという形は取れないという状況です。研究所に所属の専任の常勤職員を置くことは一切認めませんでした。

5点目は、重要なことは、研究所の活動は基

本的に研究所プロジェクト、あるいは外部へ申請の助成金、こういったもので活動すること。だから、研究所には運営費として年間100万円がありますが、研究活動そのものは外部資金でやれと。こういう体制で改革が進められました。平成14年度以降は、これに基づいてずっと研究所活動を展開しています。

そこには大きな問題点があることは事実ですが、この改革が意図したものが何だったかということはいろいろ検討してみる必要はあります。少なくとも改革前の研究所活動と改革後の研究所活動とは、体制の面からも大きく変わったことだけは明らかではないかということです。

(石井) 一つ、研究所の在り方として、恐らく一番大きく変わったのは、研究所にどのようにして入所できるかという問題だと思います。

以前であれば、研究所のメンバーになるためには、研究所で活動なさっていた研究員の先生の推薦があって、運営委員会で承認されなければ、それは認められないという手続きになっていました。そういう意味では研究所のメンバーになるということ、入る人も、あるいは推薦する人も責任をもって、約束して入所するという状況があったと思います。

それがいわゆる新体制になると、自己申告でどの研究所にでも入れるようになった。これによって、研究所の研究員が一体誰なのか全く見えない状況も生まれてきたと思います。

いずれにしても、私たち以上に研究所の所員もそうでしょう。そこでさまざまな運営の事務に携わってきて、いろいろなことを最もよく知っている竹内さんに、その辺りの変化について、お聞きしたいのですが。

(竹内) 先ほどから私に來ますが、新しい体制になってから研究所活動と一緒に何か一つの目的に向かってやるというのはなくなった、というのが事実ではないでしょうか。研究員になり

ましたと、あるとき先生が研究所にやってきますが、顔も所属も、もしかしたら東洋大学の先生かどうか分からない先生が、研究員としてやって来るというのが日常になるのです。だから一体、あの研究所改革で研究所をどうしたかったのだらうかと思います。今は一つの研究所というより、何かの研究費を取った先生が書類だけ運営委員会を通して、調査に行くことが許可されるという手続きだけの関係になってしまっています。もちろん研究発表会とかそういうことで皆さんの活動を見ることは出来ますが、将来この研究を進めていきたいと思いますとか、研究所としての目標などは考えられないような状況かと思っています。現在研究所に所属されている方は、恐らく100人くらいおられると思いますが、私は今はほとんどお顔が分かりません。

(比嘉) そのころ私は所長で、研究所に登録されて、われわれが知らない人が理事長決裁で登録されていることを知り、慌てて12月に研究員総会を開きました。そうすると、全く知らない研究員がいっぱい集まったし、最初から集まらない研究員に至っては全く知らない人でした。これではまずいから、集まって何か研究班でもこしらえて一緒にやろうかと言いましたが、登録した人も二つ研究所に入ってよしいというから、おたくのところに入ったのだということでした。今おっしゃったように、従来積み上げてきたものが、目的のない人たちがいっぱい入り込んで、ただ研究所の座席を確保したような感じになって、運営しづらくなったのは事実です。

(谷口) 実は、まだ改革の本当の意図が現れていないと思います。それはどういうことかという、全教員が二つの研究所を選択で選べるということは、どこかの研究所にできるだけ所属してほしいというのが本音だと思います。それによって、所属したところで研究プロジェクトチームを作って、外部資金を取って、それで活

動しなさいということは、それぞれの研究員は専任教員ですから、研究活動は研究所でやりなさい。いわゆる教育活動は学部、学科でやりなさいと。こういう体制にしようとしたのです。全専任教員はそれぞれが研究活動を研究所に属してやる。そういうことを意図しましたが、実際にはまだそこまで至ってない。

(比嘉) こういういろいろな大きな改革の中で、当局が盛んに外部資金を取ってこい、これからは外部資金をしっかりと取って、自分の実力で研究しなさいということでした。われわれは腹立たしく思っていました、とにかくやってみようということで、私立大学学術研究高度化推進事業にかかわる学術フロンティア拠点形成についての研究費を申請してみることにになりました。2月の締め切りに合わせて突貫工事、数名、今日おられる石井さんもそうですが、半徹夜状態で作って、それを仕上げました。このとき一番頑張ってくれたのが竹内さんです。当時そういう大口の予算請求をするときには、理事会の承認、担当部局の承認を得なければいけないということでした。だから、説明会があるから出てこいというので、急きょ呼び出されました。

そのときに三つぐらいの大型プロジェクトの中で、私のプロジェクトが高額だったのです。みんなにからかわれました。理系でもこれだけなのに、あなたのところはこんな億単位の要求をするのか、一体何に使うのかと、みんなから言われました。ある理事は「私も文部省にいましたが、文系でこんなに大きなプロジェクトは見たことがない、通るはずがない」と。申請もしてみないで通るはずがないと言えるのですかと、ちょっとけんか腰になったものです。

それから間もなくして、研究は採択されましたと理事長から急に呼び出されて、学長の方からも内諾をいただいた、については詳しく計画書を立てなさいと。びっくりしたのは、私たちよりも法人や助成課の方でした。こんな大口を当

てたというのでびっくりしていました。

私は、別にこういうことはびっくりするに値しないと。なぜならば、われわれのアジア・アフリカ文化研究所の底力というのは40年も50年も積み上げてきて、それだけの実績があるので、それを認めないことはありませんと。われわれのこした実績を認めたに違いないと、私は堂々と言いました。

やはり、そういう背景には、われわれの研究所がどれだけ頑張ってきたかがそこに集約されていると思っています。結局竹内さんに今もお手伝いしていただいてずっとやって来ました。もう5年で集結して終わろうかという段階で、再度、継続申請をしてみたらということで、継続申請をやりましたら、再び採択されました。

そのときは、学術フロンティアというのではなくて「戦略的基盤形成支援事業」という名称になっておりました。その3年研究で億に近い金がまた下りてきたということで、この実績は、この50年の研究所の大きな積み上げのもとに出来上がってきたものです。外部資金を取ってみろということに関しては、堂々と取って、今、アジアの8カ国、今回は12カ国というアジア全域に対して研究ネットワークを作っています。アジアの研究に関しては、われわれが私立大学の中で一番自負心を持っています。ついては、名古屋大学や広島大学、国立大学の先生方もみんなうちの傘下に収めて、大々的な研究拠点を作っておりますので、これがアジア文化研究所の実力だと、私はいつも言っているわけです。

(横川) 比嘉先生がセンター長を務めるアジア地域研究センターはいま全学唯一研究所所属という形をとっていますが、ほかのセンターは形成母体から飛び出し、完全に独立した組織になっています。私は、いまのセンター方式がとっている体制や研究システムは理工系的な発想であって、文系の研究にはふさわしくないやり方だと思っています。新製品を開発する組織

のように、製品が完成すると、はい、このプロジェクトは終わりです、また新しいものを作りましょう、という具合に、研究の継続性は途切れてしまいます。

### 研究所のありかた

そういう意味で、研究所のこれからどうやっていくかというとき、研究の継続性を持つことが重要だと思います。私は、谷口先生の後を受けて2年間所長をやったわけですが、継続していく場合は研究所全体が結束して研究を進めていかなければならないと考えました。ただ、研究所全体が1つにまとまるのはいまでは非常に難しくなったので、とにかく「結集」する、これが一番大事でないかと考えました。いまでは研究員同士が知り合いになることすら課題になっています。そこで研究所の全員が参加できる行事を何かやろうということで、研究大集会、いまは年次集会と呼んでいます、そういうものを始めました。

研究内容の継続性は大事です。それからもう一つ、組織の継続性ということも大事です。いろいろなプロジェクトが組織されていますが、やはり研究所意識を持ってもらいたいです。

いまは研究班という言葉が定着してきましたが、谷口先生が使い始めた名称だと記憶しています。研究班というのは研究所内の研究組織を意味し、研究所メンバーによる研究グループ、研究所プロジェクト、科研費プロジェクト、さらにはアジア地域研究センターなど、研究所を母体とするすべての研究組織を研究班と称して、研究所全体の研究活動を盛り上げていく原動力として考えています。このように横のつながりをもつことで、ある程度の結束を強めることができるのではないかと思います。いま、幽霊研究員との言い方があります。自分たちで研究班を組織しないか、組織したらぜひ報告して欲しいと研究員に呼び掛けたことがあります、反応が全然ありませんでした。この幽霊研

究員が増えたのは、先ほどお話にあったように、要するに二つの研究所で登録することができるから登録したと、ただそれだけの話ですから、何か一緒に研究しようといっても無理みたいですよ。2箇所にも名前を連ねておくと、発表の場が増えるということで、名前を書いたという方も結構いるかと思います。こうした決まりが研究所の結束を弱めているのです。

所長経験者の中で私が一番若輩で、知らないことがたくさんありますが、創立趣旨などを拝見しますと、研究所はきわめてはっきりした目的意識を持ってアジア・アフリカの研究を始めたことがわかります。今の表現を使えば、第三世界が戦後重要な位置を占めるという認識のもと、これらの国々の実態およびわれわれとの関わりを真剣に探究してきました。その内容が「伝統文化の変容」という線につながっている、これが、特徴の一つじゃないかと思います。今年度で「アジア地域研究センター」プロジェクトが終了しますので、こうした特徴を活かし研究所の看板となる新たなプロジェクトの立ち上げを考えなければなりません。

(石井) 研究所の在り方の変化についても、お話をいただきたいと思います。この研究所の在り方が変わったということもありますが、それと同時に、多分、世の中が大きな変化を見せていて、これは私がすごく感じるのですが、恐らく研究の質が変わってきたというのがあるのではないかと思います。谷口先生を中心にしてやられていた『華陽国志』の研究は、普通の時間をかけてできるようなものではなくて、ある一定の何十年という時間の中で成し遂げられる研究だったと思います。今のように、毎年毎年新しい成果を出しなさいということになると、先ほど針生先生もおっしゃっていましたが、ように、勉強しながら研究所でみんなで何か積み上げていくという、そういう時間が恐らく持てなくなり、とにかく毎年成果を出しなさいというふうに変わってきたのが、実はどうもこの

辺りの時期ではないかと私は感じるのですが、谷口先生、その辺いかがですか。

(谷口) 私よりほかの先生方があればいかがでしょうか。一つ私としては、針生先生や恩田先生、吉田先生のときに研究叢刊として、明代の民族史料を『明実録』から抜き出してまとめました。これは、第2巻までを所長、先生方の尽力で出版することができました。第3巻目も準備していましたが、これは吉田先生のときに一所懸命頑張っていたが、発行の一手手前まで来ていたが、最終的に出せなかった。いずれにしても、今後このような研究叢刊が出版できなくなったことは、大変に残念です。

ただ、『華陽国志』については針生所長をはじめ歴代所長に大変協力いただいた。われわれは船木先生を中心として訳注作業を積み重ね、これを毎年のように年報に掲載させていただきました。これは、ボリュームにすると1年間の年報の約半分に近い。そして、出版費にしてみれば大変高額な経費をわざわざ取っていたが、ずっと続けたわけです。

そういった意味においては、大変お世話になったことに感謝すると同時に、こういった研究が今後は大変やりにくくなるだろう。それは一つには予算の面と、研究員の構成メンバーの面、こういった面からやりにくくなるだろうということが予想されます。そういった意味において、今の体制が果たしていいのかどうかという、危惧の面を感じています。

(石井) 飯塚先生はどのようにお感じになりますか。

(飯塚) 本当にこの研究所ができる初期の段階で、私立大学の研究所というのはどういう形であればいいのかということについて、各大学を調査したことがあります。それで大体まとめたのは、大学の中で一つの研究所が研究所の体を成すには、7名ぐらいの専任の研究員がい

て、3人の事務職員がいる。これが研究所を正常に維持する一つのパターンではないかという考えがまとまってきたのです。ただ、各大学いろいろな事情でそういう独立した研究所を作るというのは、国立大学を除いては私立などでは大変難しいということがあります。

あと、それならばどういう形の研究所であればいいかというと、東洋大学の場合には非常に珍しい形で学部附置の研究所がどんどんできていました。この学部附置研究所の位置付けについて、学部で各先生方がご自分の研究をし教育をしているものと、学部内で研究所を持っている意味がどういうふうに違っているのかということですね。そこがあまりはっきりしていません。

それに対してアジア・アフリカとかあるいは東洋学のような場合は、基本的に各学部の先生方が集まって、そしていわば学際的な研究ができるのではないかという可能性がありました。これには、人は集まりますが、その財政的な基盤がないと発展しにくいということがありました。それは、アジア・アフリカ文化研究所、アジア文化研究所が長年通して闘っていたのは、法人当局に予算をちゃんと確保してくれということでした。

学際研究を組むときの発展性というのは、お互い研究分野を持ち寄るということですが、予算が確実であれば、それをさらに学内だけでなく、また日本だけでなく、海外へ出て行って、国際的な地域のそれぞれの調査などを通じて、それを研究の場面に持ち帰り、それを積み上げていくことができる。そういう努力を積み重ねることによって研究の成果が出てくると思います。

先ほど、特にこの東洋大学の場合、文化系学部に伝統があったという点で、いわゆる文献研究は非常に重視すべきことでした。それは確かに落ち着いてやらなければいけない。それでありながら、最近の世界的な風潮かもしれませんが、東洋大学もそういう影響を受けているわけ

ですが、いわゆる点数主義で、学術的な発表が何でもあればいいという形で、外に向かって見える形を示していかなければいけないという時代になり、地味な文献研究などはなかなか評価されていかないという状況があると思います。

しかし結局、一つの覚悟としては、やはり先生方がいろいろな方面から集まっていく。つまりそこでグループができるならば、グループ研究というものを積み上げる努力ですね。そして、そこではできるだけ共通のテーマを設定していく。しかも新しく展開する科学的な積み重ねをさらに発展させるような内容を含んだテーマを設定していくということが一つ重要ではないかと思うのです。

ですから、このアジア文化研究所は大変苦勞してやってきているのですが、姿勢として間違っていたのではない。さらに、研究を深めていく努力、資金を得る努力、それには大学ができるだけ理解して協力してくれるということですね。そういうものが積み重なれば、さらにもっと発展できるのではないかという気がします。

(石井) ありがとうございます。

では、ここで今後どのような形で発展させていくのかという話に入りたいと思います。例えば今までですと、共同研究の中で若い専任教員なりさまざまな人たちが入って、そこで上の先生に鍛えられるというシステムがあったと思います。横川先生の時代、そういうものが少しずつ研究所改革とともになくなりつつあり、その一方で、横川先生の時代に院生研究員のような形が始まってきて、新たな後継者養成、もしくは新しい指導体制というか、そういうものが出来上がってきたと思います。

## 研究所の将来像

恐らく、そういう意味では研究所としては、こうした形での後継者の養成のスタイルは初め

て経験することです。今後どのような形で研究所がそうしたものに对应していけばいいのか、あるいは今までの中でやはり良いものは残して取り入れて、そういう方法やシステムを活かしていくことも必要だと思います。

その辺について、今まで50年を顧みながら、所々にもう既にご提言いただいているわけですが、この辺りのことも含んで、少しお話しただけだと思います。どの先生から口火を切っていただけますか。

では、横川先生の時代に院生研究員というのははじまりましたので…。

(横川) 院生研究員の制度をぜひ取り入れたらどうかというのは谷口先生が一番積極的に提案されて、野間先生もいろいろと院生研究員を指導されてます。このお二人の先生から具体的に、その後、院生研究員をどのようにして指導してこられたか、お話をいただいたらどうでしょうか。

(石井) では谷口先生、お願いします。

(谷口) 研究所改革の中で奨励研究員や院生研究員など幾つかの研究員を研究所は抱えていいのだという体制になりましたが、当研究所では実質的に院生研究員のみをスタートさせたのは3年前だったのですね。この院生研究員は博士後期課程の院生しか所属できなく、前期課程の院生は一切できないわけです。そういった院生を抱えたということもあって、これを実質的に一緒に研究できるような体制としていくためには、研究班のメンバーの一人として院生研究員も加わって、具体的に日常的な活動をし、そういった活動の成果をもって若手育成研究所プロジェクトを申請していく、こういうことを今後どんどん発展させるということが大切ではないかと思っています。

(横川) 一言、私は院生研究員を育てるという

ことは、われわれの研究の継続性を維持していくうえで非常に重要な役割りを果たすものだと思います。

(比嘉) 私は、学術フロンティアという大型プロジェクトから、そして私立大学学術研究高度化推進事業によって、研究の拠点形成を行う資金を頂いたわけです。それはアジア文化研究所ではアジア地域研究センターという形で置いて、ずっと研究を続けてきたわけです。

それでアジアの12カ国・地域をくまなく見て、われわれの8年の実績を積んできました。今、東洋大学はアジアの共生社会というものを取りあげており、本学は共生社会を目指すということを盛んに言っております。

私はアジアの共生を考えていくときに、あなたの方の考えていることと、われわれが現にネットワークを組んでアジアをくまなく見てきた研究成果とをドッキングさせたら素晴らしい共生研究ができますよと、いつも言っているのです。せっかくあれだけ ANSWER を作って、しかも研究拠点も置いて、研究蓄積も積んできていますから。校歌にも、「亜細亜の魂再び此処に」といっている大学が、今こそアジアに目を向けるべきですよ。実際にそういうことを大学に代わって、本当に着々とやってきたのはむしろアジア文化研究所ではないかというぐらいの自負心を私は持っています。

だから、やはり今後大学としてしっかりした、これが東洋大学の目玉だということを考えると、東洋学研究所やアジア文化研究所の過去50年の実績というのは、大学が旗印にしてもいいのではないかと。特色ある研究所を持った大学ができるのではないかと。

そういうところに大学がもう少し注目してほしいし、われわれもそこに努力していかなければいけないのではないかと。大局的な話ですが、大型プロジェクトでいろいろやってきたせいもあって、せっかく研究拠点も作ったのに、それが終わったらまた解散してなくなる、というの

は非常に残念に思います。

(吉田) 今の話をつなげますと、比嘉先生が中心になって学術フロンティアでの活動を経て、アジア文化研究所の活動領域を広げて、新たな研究成果を積み上げたと思います。ただ先ほど来、一つ宿題になっていた、谷口先生がおやりになっていた研究、これは非常に地道な研究です。だから、大学の教員の研究としては、谷口先生はプロジェクトでやったかもしれませんが、なかなかプロジェクトになじまない、個人研究でこつこつと積み上げていくものがあります。これは個人研究費を確保しなければいけない。それと同時に、プロジェクトのできるものはプロジェクトでやっていく。そして、積み上がった研究成果を、研究所で出版が難しい場合も出てくるので、この場合は大学が独自で予算措置をするか、あるいは井上円了学術振興基金で事業の一つとして出版助成金みたいな形で支援する、今のように学部附置の研究センターみたいになってしまい、外から資金を持ってこいといっても、こういう景気低迷の時では、なかなかいろいろな基金の支援が得られない。文科省でも大型のものにだけつぎ込んでしまって、非常に偏って、助成する件数が少なくなってしまう。

われわれは今までの50年の研究所の歩みを受容し、伝達し継承し、発展させる中で、研究所の中で打開しようというのではなく、ある意味では研究所の実態、大学の研究の在り方、助成の在り方について検討し、今後の大学の研究所の在り方を見直すいい機会ではないか。そういう気がするわけです。

研究所の中で、困った困った、何とかしようということだけでは、やはり衰退の一途をたどるわけで、東洋大学全体として名声を高め発展するために研究所というのはどうあったらいいかということを、過去—現在—未来の文脈で、そういう形を含めてこの50年の総括をすることが大事ではないかという気がします。

(石井) ありがとうございます。

恩田先生、いかがでしょうか。恩田先生が退任なさった後、所々で現在の研究所の話は聞いていると思います。多分、先生がいらっしゃった時代とはだいぶ大きくいろいろ変わってきて、研究所のOBとして、今の私たちの活動の中で先生から何かアドバイスしていただけるようなことがありましたら、ぜひこの機会にお願いしたいと思います。

(恩田) 二つ研究所に入れるという、そうなれば動機がどうしても薄くなるということで、その中にまた動機の強い人が入れば、その研究所が活性化しますが、弱いというのであれば研究所の研究意欲を阻害する面もでてくると思います。

そうすると、院生の研究員というのは、やはり一人一人見ていると、自分でやりたいというものもいるでしょう。そういう面では動機は強いのではないですか。それだと、こういった人たちを育てることは有効ではないか。今まで研究というのは、育てるのではなく、集まってやることだったけれども、この場合には育てながらやるという二つの側面があります。

しかし考えてみれば、手間はかかるけれども結果はいいのではないか。手間がかかります。育てて、やる気を起こさせて、それで力を付けて、それで研究させる。時間をかけてやるという、研究というのはそういうものかもしれないので、そういう場合には既成の研究員がやはりやらなければいけないでしょう。そうすると、育てる体制というか、教育体制をどう整えるかという問題が一つこの研究所に課せられた問題ではないかという感じがします。手間はかかりますが、結果はいいということですね。

(石井) お二人の先生から貴重なご意見をいただいて、こうした話を聞きたびごとに、これまでのこの50年の間に研究所の在り方というのは少しずつ変わってきている。そういう面で、現



在求められている研究所の役割とすれば、それは一つに、研究をするということももちろんですが、もう一つは、後継者を育成して、なおかつそうした研究の成果をうまく発表できるような状況を、研究所という場を用いながらいうか、そういう組織を使いつつ、何とか確保していくということが今後は特に求められていくのではないかということが、今のお話の中に出てきたと思います。

いろいろ方向性があると思いますが、今後、多分問題になりそうなのは、先ほどちょっと出ましたが、実は研究員同士がよく分かっていないと。例えば、私と野間先生は前からいるので顔はもう知っていますし話もしたことはありますが、研究員の名簿を見たときに、現所長の谷口先生ですら、名前を知っているけれども直接話をしたことがないという研究員がいたりするような状況です。誰が実際にどういう研究をやっているのか、何の専門家なのかも分からないような、そういう側面も出てきていて、その部分ではやはりいろいろ今後乗り越えなければいけない問題が山積しているという感じは、実はちょっとしています。

(恩田) それから、こういう人たちが研究所に入った場合、結局これは本当に好きな人は毎日のように来るわけですが、そのほかの人はたまにしか、名前だけということになってしまうので、やはり研究というのはある場所において接触する率が高いほど研究意欲が高まってくる。その点の考慮が必要です。ただ入っていればいいというものではないので、その点の交流の仕方というものが非常に大事ではないでしょうか。

(吉田) もう一つは個人情報保護が問題で、何か研究交流しようと思ってもさっぱり相手が分からない。これは学会でもそうです。学会の最近の会員名簿を見ても名前しか載っていませんね。そういう意味では、個人情報保護という、

制度にみんな乗せられてしまって、こういう研究交流ができないという気がします。東洋大学もそうですね。前は、私たち名誉教授にも名簿をくれましたが、今は一切提供なしですからね(笑)。

(比嘉) それから、今、二つ考えていますが、先ほど吉田氏がおっしゃったので、今までわれわれは研究所内で一所懸命積み上げてきましたが、それをどう相手方、例えば教学サイド、法人サイドの方へ、研究所としてこれだけの成果を上げているという、こちらから逆に働き掛けるといことも今後は必要ではないかというのが一つです。

二つ目は、わが研究所の一番いいところは、たまり場の研究所で、いつでも井戸端会議で、あの研究所へ行くと誰かが来ていて、そこでおしゃべりしながら何か雑談してという雰囲気は、まず東洋大学の中でうちの研究所だけではないかと私は思っています。あれも、私は研究の一つではないかと。いわゆる人間交流みたいな。来て、みんなでわいわい言って、必ず誰かいるという、そういう伝統はできていますので、これも大事にしたいですね。

(恩田) 今、比嘉さんがおっしゃっている、外国でもよくサロンのようなところがあります。会って、お茶を飲み合えて、お互いに話し合っている。ところがやはり研究者だから本質の研究が話に出てくるわけです。それが大事なのです。そこでいろいろ新しい発想も出てきます。だからやはり、触れ合うチャンスですね。今、どうなったか知りませんが、今まで私の時代では竹内さんがおられて、そこで人が集まっていた、お茶を飲みながらお菓子を食べながらワイワイやっていると。それが私は非常に大事な研究のもとになっているのではないかと思います。それはどうなっているのですか。

(谷口) その意味においては、来年以降につい

て、大変危惧しています。具体的には、先ほどのべた研究所改革の段階で、研究所に常勤の職員が配置されなくなったのです。それがために研究協力課から派遣された人を研究所に詰めてほしいという要求をしました。ところが、実質的にそれもほとんど認められていない。今は、アジア地域研究センターの人が絶えずセンターに詰めている。とりわけ竹内さんが詰めておられるのですが、来年度以降はセンターが終了するわけです。そうすると、研究協力課から常勤の人が一日中研究所に詰めるかという、不可能に近い状態です。

そういうことで、先生が言われるような、研究所が絶えず開いていて、そこに誰かがいるから寄ってみようという状況が今後取れるかどうか。むしろ取れない限り、私は継続的な研究体制は大変困難ではないかという気がします。

(吉田) 比嘉先生、先ほどいろいろ苦勞されて、本当に法人とやりとりして闘うと言っていたけれど、闘うという言葉を活動すると、言い換えて、活動する研究所という話で如何でしょう(笑)。実質はおっしゃったとおりだと思いますけどね。

(石井) 一つ、多分朗報というのかどうか分かりませんが、今までに恐らくなかったことの一つとして、以前だと、70歳で定年を迎えた先生は、研究員から姿を消した時点で終わったはずですが、現在のシステムだと、それらの先生が客員研究員として残ることができるということになっています。そういうシステムに変わりました。

ですから、そのの部分においては、どう言ったらいいのでしょうか、若い世代の人と、恐らく本来ならば会うことのなかったような先生とがうまくすれば出会えるような、そうした可能性が持てるようになりました。あとは、残された私たちがどのようにその辺りのシステムを構築していくかということが、恐らくみんなの集え

るような場とといいますか、そういうものを構築するのかというのが、先生たちから出された話の中で、おまえたち考えろという一番の宿題なのかと受け止めております。

まだお話も尽きませんが、ここでいったん野間先生の方に司会を戻します。では、先生よろしくをお願いします。

(野間) もう終われということだと思いますが(笑)、では僕の方にまた戻ってきましたので、締めさせていただきます。

後半の座談会では、括弧付きですが、「改革」の時期を中心に研究所の在り方や問題点を話し合っていただと思います。その「改革」の中でやはり研究所が失ってきたものというのは、一つは人だと思います。人のつながりといった方がいいかもしれません。人のつながりが研究所の雰囲気を作っていたのが、従来の姿だったと思います。それがあって研究所にみんなが寄ってくる、引かれてくる、いわゆる磁場になっていたと思います。その磁場の中心におられたのは、僕は竹内さんだったと思います。竹内さんを失ったというのがやはり研究所にとっては大きなことだと思うのは、僕は記録に残しておきたいと思います。その磁場の中心におられた竹内さんに、やはり最後に何かおっしゃっていただきたいですね。それで終わりにしたい(笑)。お願いします。

(竹内) まずはやはり、研究員や、研究員でなくても集まれる場は作っておかないといけないと思います。科研を取るために研究所に私は入りました。科研に出して通りました。それでどうしたらいいですかと来る方がものすごく多くなっていますが、そうではなくて、昔だったら、先輩の先生が研究員であろうとなかろうと、大学にいらして、研究所にいらして、「どうなの」「これなら誰か紹介してあげる」という雰囲気があった。私は、それはこれからも残せると思います。誰かいないといけません。いくつか

のプロジェクトが今できていますが、それももちろんいいですが、今までのいいところと両方何か残していける方法をやはり考えていかないと、それで終わってしまう感じがあるのではないかと思います。

だから、老若男女が集まって、それで研究所として進めていけるプロジェクトというか、やはり研究所の目ざすものというか目的といったらいいか分かりませんが、それに向かってみんなが研究できる何かがないと、研究所という場はだんだん消滅して行くのではないかと思います。大学院生を指導するとか育てるとかということも言われていますが、現実には自分達の報告書を書くのにも四苦八苦している状況です。ゆっくりでいいから一步一步進めていける、年度をわたってやっていけるものを作っておかないと。プロジェクトが終わったら、「はい、これで終わり」となっていくのではなく、やはり最初研究所ができたころにあったテーマみたいなものを一つこれからも作っていく、そういうものを持って継続しておかないと、この研究所の存在意義が問われることになって行くのではないかと思います。

(恩田) 私がちょっと補足したいのは、私は前から研究所の研究もやっていたことがあります、その場合、研究という仕事がありますし、事務という仕事もありますが、研究事務というのは、研究もできて事務もできるという人がいた方が強いです。竹内さんはそれでした。それが非常に強い。あるいは、研究をしなくても研究というものに対してかなり知識、造詣を持っていて事務ができる人、こういう人が必要なのです。ただ、事務的なことをやるというのと、研究を分けてしまうのが問題です。その両方ができる人が非常に有力で研究所にとっては必要です。そういう人を育てる必要があるのに、それがなくていいでしょう。今、分離している。そこが問題ではないかと思います。その点、竹内さんは両方できるというので、非常に良かった。わ

れわれの研究に対して大変有利であったということがいえると思います。しかし、今はむしろ研究と事務を分離させようとしています。そこがちょっと大きな研究所の発展において阻害条件になっているのではないかと思います。

(野間) 問題の核心といえますか、今、指摘していただいたとおりでと思います。今後とも研究所に対しまして、皆さまには相変わらぬご指導をお願いしたいと思います。では、締めてよろしいですか。最後に、所長にごあいさつをいただきまして、これで終わりたいと思います。

(谷口) 本日は先生方に50年を顧みていただくと同時に、今後についての貴重な意見を賜ったと思います。なお今年10月に開く国際シンポジウムと祝賀会にもぜひお集まりいただき、盛大な記念行事を行うとともに、研究所の新たな出発点にしたいと願っております。

(野間) ありがとうございます。では終わります。